

12月7日(日) 劇団からっかぜ「あした、天気になあれ」

菊地奈々子

とある病院の病室が舞台。お互いを知らない、たまたま入院して同じ部屋になった4人の男たち。一人は初老の、一人は妻のいる中年の、一人は個室を好む会社員の上司、一人は独身の若者。まだ携帯電話の存在しない時代の話だ。

お互いのことに関心に向け、徐々に互いの状況を知るようになる、というのがこの芝居の醍醐味だ。そして、他人のことに口を出したりもし、たまたま同じ病室になっただけなのに関係が深まっていくというのが狙いだと感じられた。爪を切る、歯を磨く、といった生活の癖までも、知るようになる。

ある日新参者がやってくる。若者らしい。そのお母さんが同じ病室の人に鉢植えを配る。えっ？鉢植えって縁起が悪いんじゃないの、根付くというから…、と思った。いつまでも病室にいましょってあいさつかと思ったが、ちょっと気になり、その植物、南天について調べてみたら、「難を転じて幸となす」と解して縁起物とされるんだそうだ。へえ、この物語のラストを謳っている？！

若者(和男)が母に対して悪いことを言おうとして、同じ病室の小倉、坂西が「それは言っちゃいけねー」と止めるシーン。現在だったら、そんなおせっかいなど決してできないと思う。そこが昔との違い。自分の幼少時を思い浮かべても近所との関係は密で、親がいないとき預けられたり、節分と言えば近所の方に皆集まって豆まきに参加してお菓子など拾い、もらったり…というのがあった。お互いの子どもを見守るとというのが常だったように思う。

個室に行きたいけど行けずにカーテンを閉めて個を守る本橋のもとへ奥さんがやってくる。その妻役で登場で私ははっとした。というのは、それまで淡々と会話劇が繰り返されてきて、少々退屈な思いをしていたのかもしれない。元気な妻役の中村さんの声で芝居に活気が出たと感じた。南天がシクラメンに追いやられた。

この芝居は原作があり、その原作を忠実にお芝居にするということが各役者に課せられていると思う。すると、役者の力量が問われる。初めの小倉さんのセリフの言い回しや仕草は自然で惹かれた。

後半では、会社の部下がやってきて物語が急展開。皆に本橋の実態がさらされる。短い間に夫婦関係、仕事上の人間関係が明かされる。ラストでは、坂西の、離婚すると決めたらしいのに何故か夫婦で帰っていくのが少々疑問に残ったが、親子関係は何とか円満解決したらしい。そして、本橋の立ち姿で舞台が閉じた。予想もしなかったラスト。本橋の未来を、気持ちの変化を、決意を、観客に思わせたのだろう。それは「あした天気になあれ」というタイトル通り、どんな困難も苦しみも天気になればすべてOK！人生が晴れますように、という願いだろうか。

舞台のベッドは病院にあるそのものベッドのようで、4つのベッドにライトがそろって備わっているのにリアリティを感じ、看護師の白い制服も白い帽子も白いタイツも本物の看護師をしっかりと表していた。

はままつ演劇フェスティバル2025劇評

澤根 孝浩

劇団からっかぜ

「あした天気になあれ」

2025/12/7 14:00

誠実な演劇舞台を観られて満足、というのが一番の感想であった。1986年の地方都市の病院の一つの病室が舞台。一幕で物語は進み、ここに入院する四人の人間模様が描かれる。それぞれに入院する前にもある人生、その作品の行間ともいえる「見えないもの」をどれだけ客席に見せられるかが肝のように感じた。病室から見えているとされる火葬場の煙突も同じだろう。

1986年という約40年も前という時代背景はそれほど前には出ない。普遍的な人間の物語。家族の煩わしさや、もどかしや、すれ違いやら、再生。

ラスト、病院というのは回復して社会へ帰る場所であり、同時に多くの人間が死に向かっていく場所なのだということに改めて思いを巡らせる。病室から帰って行く人たちには、またここから人生がある。

退院を祝い迎えに訪れた妻。離婚届を渡されてからの登場だったが、あそこから関係が再生されたのか、情で訪れただけなのか、荷物を預ける役者の演技から再生を選んだのだと勝手に解釈をした。ここも行間だ。

作品の時代を考えると、この時代よりも現代は難しい時代に入っているのだということに逆説的だが思いを巡らせる。入院している際に見舞いに訪れる親族がいるのが当たり前ではないし、直接会いに来て厳しいことを言う部下がいることもむしろ稀だろう。難しい家族関係を描きながらも、古き時代の良さの陽炎のようなものを見せてくれることが今の時代にこの作品を上演する意義でもあると感じた。

役者陣は皆、骨太な良いお芝居を見せてくれた。この時代の病院の一室であり、入院患者、家族、看護師、同僚が懸命に生きている姿を信じさせる力があつた。セリフの言葉の言い回しが独特で落とし込むことが難しかったのではないかと思う場面もあつたが、誠実な演技をしていた。

強い言葉の裏には脆さがあつて、穏やかな笑顔の下には悲しみがあつて、そういう人間を描けるのは演劇の強さだと、教えてもらえたような思いを持った。

劇評の趣旨と少し外れるが、観客席での携帯電話の着信音が何度も鳴ることがあり残念だった。

劇団からっかぜ あした天気になあれ (12月7日(日) 14:00~)

舞台装置の作り込みが非常に細かく、小道具から大道具に至るまで、病院の大部屋という空間の雰囲気 がしっかりと立ち上げられていてとても良かったです。爪切りや歯ブラシといった、個人のアイデンティティを示す道具が用意されている点にも強いこだわりを感じました。同じ空間にいるはずでありながら、カーテンを閉めることで姿が見えなくなっても、会話や気配からなんとなく性格や関係性が伝わってくる点が印象的でした。また、カーテンの向こう側で人が動いていることがシルエットから分かるようになっていたのも面白く、病室という空間の使い方としてとても好きでした。一方で、ホールという舞台上で上演するには、あまり見えてほしくない部分が見えてしまう場面もあり、その点は難しさを感じました。照明は地明かりと青を基調としたシンプルな構成で、転換の際には、舞台上の人物それぞれが布団を畳んだり身の回りのものを片づけたりする様子が描かれ、日常をそのまま覗いているような印象を受けました。場面転換の一種ではあるものの、黒子を使わず役者さん自身が動かしていたため、個人的にはあまり気にならず、自然に展開していったのが良かったです。また、それぞれのベッドについているライトのみが点灯する演出は、皆で会話している賑やかな時間と、一人で過ごす静かな時間の対比をはっきりと感じさせ、印象に残りました。

音響は必要最低限に抑えられており、病院という場所の質感を出すうえでとても良い選択だったと思います。ただ、舞台音響とは直接関係ないものの、携帯電話の通知音やアラームの音が鳴る場面が非常に多く、どうしても気になってしまった点は少し残念でした。

物語面では、それぞれの人物の性格や人生が丁寧に描かれており、日常の出来事とその後の展開につながる伏線のように機能していて、「あ、そういうことか」と思われる瞬間が何度もありました。舞台上では、特別な事件が起こるわけではない、いわば普通の病院での生活がありのまま描かれている印象を受け、その点がとても良かったです。生と死も過度にドラマチックに扱われることなく、時間の流れがもたらす結果の一つとして溶け込むように描かれていたように思います。小倉さんが亡くなったことはナレーションによって知らされますが、その後の空気感には寂しさと同時に穏やかさがあり、覗いている側としても静かな感情を抱かされました。

役者さんの演技は全体的にとっても自然体で、物語の雰囲気によく溶け込んでいました。それぞれの人物の性格や思考、人生が説明されすぎることなく伝わってきて、皆さんがじっくりと役や舞台に向き合ってきたことが公演全体から感じられました。看護師役の方々も非常に良い味を出しており、同じ看護師でも先輩と後輩で慣れの差がはっきりと分かり、後輩の若さや、先輩の患者や同僚への接し方のうまさも自然に伝わってきました。また、個人的にはお母さん役のキャラクターがとても強烈で、登場以降は自然と視線がそちらに引き寄せられる感覚がありました。主役とは少し違う立ち位置でありながら、一番目立っているようにも感じられ、好みは分かれると思いますが、その強さ自体には独特のうまみがあったようにも思います。

正直なところ、何を思えばいいのか分からなくなる側面もありましたが、それは物語が悪いというよりも、描かれている人間関係や家族観と、現代とのズレによるもののように感じました。私自身が大学生であることも影響していると思いますが、大部屋で入院していても、実際にはあそこまで頻繁に会話を交わすことは少なく、挨拶程度にとどまるが多かったため、その点には少し距離を感じました。一方で、さまざまな家族の形や人生が描かれ、一概に良い側面ばかりではない中でも、誰かと一緒にいることの

良さが見えたような気もします。ただ、「今この時代にこの作品を上演する必然性」という点では、あまり強く感じられなかった部分もあり、家族っていいな、と素直に思いきれなかった面もありました。舞台上で展開される会話自体はとても面白く、特に細かなやり取りや、みちさんが息子に注意している場面をカーテン越しに聞いた二人が慌てて合わせに行くところや、その後に高橋さんがさりげなく同じ行動を取っているところなど、ささやかな人情や関係性が垣間見える場面はとても好きでした。終盤にかけては、会話の楽しさの中に、人との関わりや人生の厳しさがにじみ出てきて、その落差も強く印象に残りました。

総じて、観る人、とりわけ年齢や経験によって受け取り方が大きく変わる作品だったように思います。今の自分には少し距離を感じる部分もありましたが、時間が経ってから思い返すことで、また違った感想を抱くのかもしれないと思わされました。演出全体は引き算を意識して作られているように感じられ、必要以上に盛り込まないことの良さがあり、観劇後もふとした瞬間に思い出すような余韻を残す舞台だったと思います。

しむ

「40 グラム」

(12/7…14:00 劇団からっかぜ 「あした天気になあれ」)

不景気になると「金」の値段が上がるとよく言われる。雲行きが怪しい世の中で、安定した”価値あるもの”に頼ろうとするのだろう。近年の金相場は、うなぎのぼりだ。

かつて、日本には多くの金山があった。ほとんどが閉山してしまったが、現在でも採掘が行われているのは鹿児島県の菱刈金山だけである。この金山は、金鉱石の金の含有量が1トンあたり40グラム程度（普通の10倍）と、かなり優良レベルらしい。年間6トン（中国は年間400トン）の金を産出する。少ないと思うか多いと思うか…

そんな状況の中、近年、閉山した金坑をドローンやAIなどの最新技術によって、“再採掘”を試みる会社まである。（人間の欲深さよ…）

掘削機械もない昔は、さまざまな苦勞をしながら、手作業で採掘したはずだ。とても”価値あるもの”であることは、昔も今も変わらない。

”価値”というものは、人が決めるもの。勿論「金が全てではない」が、価値の先には、“幸せ”が待っている。（じゃなきゃ、価値は下がるだろうし）

人はやっぱり、“幸せ”になりたい生き物だ。少しでも何かに頼りながら…

この芝居には、“南天の木”が登場する。「難を転じる＝なんてん」

それが“鉢植え”で登場する。「鉢植え＝根つく＝寝つく＝回復が遅れる」

どちらも、人が考えたこじつけであろうが、気になるものだ。

“価値あるもの”が、マイナスイメージで登場することで、物語の先行きを示している部分もあるように感じた。登場した役達は、南天をどう受け取ったのだろうか？

舞台上の“病室”という空間での生活・時間・人間関係を、幸せと感じたのか？また、退屈や窮屈と感じたのだろうか？その辺が、もう少し見たかったような気もした。

手で採掘していた金坑での作業も、晴れと雨では、辛さや苦勞がだいぶ違ったのではなかろうか？

自分を含めて誰かの“幸せ”を求めて「あした天気になあれ」と呟いていたのかもしれない。

滝浪倫邦（オトナ青春団）

〈全項目 30 点満点で評価 21 点〉

受付から送出し…3/5

- ・受付が混雑したのか、開演が遅れた。
- ・丁寧な対応だったが、当日精算窓口が大変そうだった。(もぎり担当の所は空いていたのだが)

舞台装置…3/5

- ・大道具はしっかり作られていた。
- ・上部の梁が、ホールの舞台では、照明的に少し邪魔になってしまった。
- ・カートの走行音が気になった。

照明、音響効果…3/5

- ・照明で上部の梁の影が出てしまった。
- ・音響は落ち着いていて良かった。

演出面など…4/5

- ・役同士の親密度？知り合い度合い？が、ハッキリと見えなかった感じがした。(初対面？何ヶ月？何年？)
- ・今回、ホールの広さが難点になってしまった。
- ・この芝居、「手元の小物」が多く、目立たないのが残念だった。

役者（個人）…4/5

- ・各役がしっかりと役者に染みこんでいた感じがした。(長く関わるという良い点だと思う)
- ・やることにシンプルで明確だった。(見る側の好みもあるが…)

役者（全体）…4/5

- ・コンビネーション、コミュニケーションが、濃く出来ていたように感じた。
- ・ホールの広さもあり、全体的に強くて良かった感じがした。

まとめ

アトリエ公演の方が、やはり密度が濃かったように思った。歌や音楽のコンサートと違い、間接的に空気を感じてもらうものが芝居だと思う(特にリアリズムや自然主義的なものは)。人が発する“空気”というものは、役者が小さくしか見えない大劇場の後ろの方や、画面越しでは、絶対に届かない(ファンとかはまた別の話だと思うが)。ある意味、演劇の特殊性を再認識したようにも感じた。